

活動報告

世界パラ陸上競技選手権大会ロンドン 2017 に参加して World Para Athletics Championships LONDON 2017

三井 利仁
Toshihito MITSUI

日本福祉大学 スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1. はじめに

2012年8月29日から9月9日まで、イギリスの首都ロンドンで開催された第14回夏季パラリンピックロンドン大会（以下、ロンドンパラと記す）は、成功裏に開催された。大会スローガンは「一つになろう（Live as one）」であり、シドニーパラリンピック以来、3大会ぶりに知的障害者の競技が復活し、20競技503種目に初参加の北朝鮮などを含む史上最多の164の国と地域から約4,280人の選手が参加した。国際パラリンピック委員会（IPC）のフィリップ・クレーブン会長が、「パラリンピック史上最高の大会」とほめたたえたほどであった。日本陸上競技選手が獲得したメダルは下記のとおりであった。銀メダル3（伊藤智也 T52/200m, 400m, 800m）、銅メダル1（和田伸也 T11/5000m）である。

あれから5年の歳月が経ち、パラ陸上競技のトップアスリート達が2年に一度、世界を目指して競う「世界パラ陸上競技選手権」が2012年のロンドンパラと同じ開催地で開催された。筆者は、今大会の日本代表派遣団体である一般社団法人日本パラ陸上競技連盟（JPA）の理事長を兼務しているため日本選手団団長として本大会に参加したので報告をする。

2. 選手選考と結果

World Para Athletics Championships LONDON 2017（ロンドン2017）には、世界約90の国と地域から1150人以上が参加、日本からは、JPAと日本知的障害者陸上競技連盟の2つの競技団体から世界ランク10位以内などの条件をクリアした50人の選手（身体障がい男子21、女子18、知的障がい男子7、女子4）を派遣した。

本大会において、日本勢は、過去最多となる全16個（金2、銀5、銅9）のメダルを獲得した。大



写真1 先発入りした日本選手団（JPAより）

<https://jaafd.org/events/02-1/20170715-1>

表1 日本選手メダル獲得者一覧

中西 麻耶	走幅跳	T44	5m00	+1.0	銅メダル	
和田 伸也	5000m	T11	15:54.29		銅メダル	ガイド 箕輪廣太郎
佐藤 友祈	1500m	T52	3:45.89		金メダル	
上与那原 寛和	1500m	T52	4:01.56		銅メダル	
芦田 創	三段跳	T47	13m58	+0.4	銅メダル	
山本 篤	走幅跳	T42	6m44	+1.1	銀メダル	
佐藤 友祈	400m	T52	56.78		金メダル	
上与那原 寛和	400m	T52	1:02.27		銅メダル	
高田 千明	走幅跳	T11	4m49	-0.4	銀メダル	
高松 佑圭	400m	T38	1:08.32		銀メダル	
鈴木 徹	走高跳	T44	2m01		銅メダル	
藤田 真理子	砲丸投	F36	6m37		銅メダル	
辻 沙絵	400m	T47	1:00.67		銅メダル	
前川 楓	走幅跳	T42	3m79		銀メダル	
芦田創・佐藤圭太 多川知希・池田樹生	4x100mリレー	T42-47	44.20		銅メダル	
古屋 杏樹	800m	T20	2:21.37		銀メダル	

会期間は7月14日から23日までロンドンスタジアムで開催され、世界記録は約30、大会記録も100以上が更新された。なお、今回の日本選手団メダル獲得者の一覧は表1のとおりである。

3. 大会運営

今大会は史上初めて、国際陸上競技連盟 (IAAF) 主催の世界陸上競技選手権 (8月4日から13日) と同年同一会場での開催であり、2つの大会はひとつの組織委員会によって運営された。ロンドンは2012年成功のレガシーをいかし、今大会を過去最高のパラ陸上世界選手権として成功させた。

会場となったロンドンスタジアムは、2012年のメイン会場のクイーン・エリザベス・オリンピックパーク内にあり、新設されたサブトラックがスタジアムに隣接され、2012年より使いやすくなっていた。大会を支える多くのボランティアは高齢者が目立っていた。

競技は午前と夜間の2部に分かれており平日のモーニングセッションでは、小中学生の学校単位の動員が行われていた。かなりの数の学校、生徒が教員の



写真2 会場を盛り上げる各種工夫



写真3 工夫された会場演出の映像

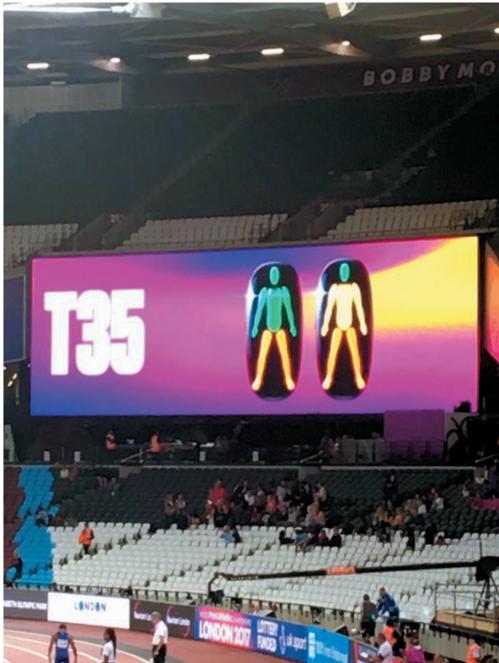


写真4 障害部位や程度を示したピクトグラム

引率で来場していた。競技の合間で時間が空いたときは、大型映像に「Kiss Cam」(写真2)、「Hug Cam」(写真3)と文字を映し出して音楽に合わせて踊らせ、盛り上げを図っていた。

大型スクリーンでは競技クラスの紹介の際に障害部位や程度をピクトグラムで表示していた(写真4)。「T35」などの意味がわかり易い反面、「T20」(知的障害)については、(写真5)に示す表示を使用しており、今後検討が必要ではないかと思われる。

パラ陸上競技では、200以上の表彰が行われるために、これまで、表彰方法については、試行錯誤がなされてきた。今回は種目ごとの表彰は場外の広場に設けられた専用の表彰スペースで行われた。(写真6) これまでは200以上のクラスの表彰が常に実施されることから、しばしば競技が中断され、競技進行に与える影響が大きかった。今回はそれを考慮して場外に持って行ったようである。それにより、これまでになく、競技進行はスムーズに行われていたと思うが、一方で表彰の都度、関係者が場外に移動しなければならず大きな負担になっていた。



写真5 クラス分け(障害の説明を大型映像で表示)

4. レガシー

今大会を観戦するには有料(大人10ポンド~45ポンド)だったが、チケット販売総数は大会組織委員会発表では、27万枚を越えた。夜のセッションではビール片手に観戦する観客の姿も多く、日本との違いに驚かされた。観客の多くは陸上競技やパラスポーツの見方をよく知っていた。イギリス選手だけでなく、世界各地の選手を称え、観戦マナーのよ



写真6 表彰式会場



写真7 スタジアムへの鉄道バリアフリー化
ができています



写真8 ロンドン市内の地下鉄

さも選手を後押しした。

毎晩の生中継はもちろん、会場にもパラスポーツを伝える演出があった。競技ごとにクラス分けを説明した映像が使用され、場内アナウンスの進行も非常にバラエティにとんでいて楽しかった。パンフレットも販売されていたが、試合時間やその日に出場する有力選手のストーリーなど、1日毎に内容が少し異なっていた。

また、ロンドンの町に出ると地下鉄や鉄道に乗ることになる。スタジアムにつながる鉄道では、(写真7)のようにまるで段差がなく安全に利用できた。しかし、ロンドンの地下鉄は(写真8)のようにフォームとの隙間や段差がかなりあったがロンドン市民の何気ないエスコートがバリアを感じさせなかった。

これは2012のレガシーなのだろう。ハードを作り変えるのではなく、ソフトを教育することで永遠のバリアフリーがそこに根付くことが感じられた。

あと3年で2020がやってくる、東京が2020以降同じように変わることができるのか楽しみである。